

ふまゝとくしを界

# 筆道資料の探訪

## 書道今昔

元禄六年に大海堂笹山梅庵が  
発刊した「手習仕用集」があり  
ます。この梅庵の書いた「寺子  
制悔の式目」の中に次のような  
記録があります。

一、人と生れて物書かざるは且  
は師の恥、且は親之恥却つ  
てその身の恥辱也 三ツ子  
の心百までと言へり志を起  
しこの恥を忘れず手習出精  
せらるべき事  
一、机にかゝりて無益の雑談あ  
るいは欠伸あくびしあるいは居眠  
り鼻をすゝり紙をかみ筆の  
管をねぶる習ひ人を手本と  
すること極悪人の所業也

人はともあれ角もあれその  
身神妙に心を正し一字一字  
を能く見入り習ひ申さるべ  
き事

一、早書きつとせ急度令制禁候まんせしめすべて気  
の短き者名人と成りたる様  
なく候間文字律儀に静かに  
書き習ひ申さるべき事  
一、筆紙を放埒はなはに致し候者は手  
揚りかね申候まを損じたる古毫こごう  
なりとも大切にする人は手  
跡早くあがり候間筆扱に心  
を附けらるべき事  
この条々心に哲し身を守るを  
以つて要とし成人の後意味の深  
き事を案ぜらるべきこと

制悔の式目如件

元禄八乙亥五月三日

大海堂 梅 庵

手習を花の蕾つぼみにたとへけり  
心の奥をかくれがにして

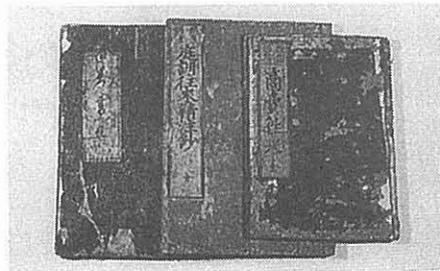
「萬書集」という手習本の刊末  
に、

幕末は百姓も字を習ふように  
専念して寺子屋に通ふたので  
ある 山根義男記ス

とありました。

現在の日本人のもつ書道感覚  
それは多くの場合書の巧拙は  
二次的なものであり第一次的  
に社会的地位の高低を論ずる  
所に絵画、彫刻、工芸等の他  
の部門との大きな特異性をも  
っている。

然し乍ら明治、大正ころ迄は  
社会的地位と書の巧拙は正比  
例し大きな崩れはなかつたが  
近代はこのことが少しも比例  
されない所に乱脈さがある。



▲江戸時代、寺子屋などで使用  
された古本（往來物）

「書は人なり」とは己に過去  
の言であつて無雑作に書なく  
る地位有る者の無定見と、又  
それを無評価に頂き鶴呑つづみみに  
する大衆の書知識のなさが之  
に和して伝統ある書苑を踏み  
荒していると思うことに多く  
接するのは悲しむべきことで  
ある。

殿村 監田（書家）